

## 「大蛇」について ①

おやさと研究所教授  
佐藤 孝則 Takanori Sato

『天理教教典』「第三章 元の理」には、「この世の元の神・実の神は、月日親神であつて、月様を、くにとこたちのみこと 日様を、をもたりのみことと称える。あとなるは皆、籬型であり、道具である。更に申せば、親神は、深い思召の上から、その十全の守護を解りやすく詳しく示し、その夫々に神名をつけられたのである」とある。そして、『同』「第四章 天理王命」では、「くにとこたちのみこと 人間身の内の眼うるおい、世界では水の守護の理。」「をもたりのみこと 人間身の内のぬくみ、世界では火の守護の理。」とあるように、神名を配して説き分けられている。

ところが、くにとこたちのみこととをもたりのみことのお姿は「大龍」と「大蛇」とされ、親神の表象とされているにもかかわらず、私たちはそれらのお姿を想像上の動物として想い描くことしかできない。「フグ」や「カレイ」のように、具体的な姿を思い浮かべることができない。また、なぜ龍ではなく大龍なのか、なぜ蛇ではなく大蛇なのかについても理解することは難しいが、それでも十分に思案・考察する必要がある。それは、「守護の理」を深く理解するには、思案と考察が重要だからである。

「元初まりの話」に登場する水域棲動物は、確かに実在する動物だけではないが、それでも幕末から明治にかけて生活していた一般庶民にとっては、ふつうに想像できたはずである。たとえその動物が実在しなくても、である。

そこで、本稿では、当時、一般庶民に認識され、想い描くことができたであろう「大蛇」の姿について考える。

中山正善二代真柱が著した『こぶきの研究』には、いわゆる「古記本」の一つ、「榊井本・五」が紹介されている。この「榊井本」では、「をもたりの命様わ、てんにてわ日輪様、この神わ女神、御すがたわかしら十二の三すじのおふに三つのけんある大じやなり。」とある。すなわち、をもたりのみことはお日様（太陽、お天道様）で女神様。そのお姿は、頭部が12個、尾部が3本に分かれ、尾部はそれぞれ剣の形状をなした大蛇である。

「大蛇」は、昔は「おろち」とも呼ばれていた。一方で、「おろち」は「巨蟒」の漢字も充てられていた。

『和漢三才図会』（東洋文庫版）の「巨蟒（やまかがち/おろち）」の項に（図1）、著者・寺島良安による以下の解説が添えられている。「『日本紀』によれば、出雲国の簸川上に大蛇（乎呂知）がいた。頭・尾それぞれ八つあり、眼は赤酸醬のよう<sup>あかかがち</sup>で、よく人を呑んだ。素盞鳴尊はこれを斬り殺したが、尾の中に一ふりの剣（天叢雲の剣）があった」とある。これは、『日本書紀』に記されていることで、出雲国の簸川上に大蛇がおり、頭部と尾部がそれぞれ八つに分岐した大型の蛇で、爛々と輝く赤いホオズキ（酸漿）



図1 『和漢三才図会』の中で巨蟒（おろち）として示された図。

のような目を持ち、人間をよく呑み込んでいた。素盞鳴尊がその大蛇を退治したとき、大蛇の尾の中に「天叢雲の剣」、すなわち三種の神器の一つである「草薙の剣」が一振り収められていた、という意味である。

このような神話を神楽にして舞う演舞が、今も島根県の石見地方（「石見神楽」）と広島県の安芸地方（「芸北神楽」）で伝承されている。とくに「石見神楽」は古く、室町時代後期にはすでに演じられていたという。現在、「石見神楽」を舞う神楽団体は100以上あり、その中の一つが、平成12年5月3日、天理市内の石上神宮境内で、演目「大蛇」を演じたことがある（図2）。



図2 平成12年5月3日、石上神宮の境内地で、「石見神楽」の演目「大蛇（おろち）」が演じられた。写真は、八岐大蛇（やまたのおろち）を想定した大蛇（おろち）を退治する素盞鳴尊（中央）。

既述したように、「榊井本」に示されたをもたりのみことは頭部が12個、尾部が3本に分かれ、尾部はそれぞれ剣の形状をした大蛇である。その大蛇を、幕末から明治にかけての一般庶民は、『和漢三才図会』に描かれている頭部と尾部がそれぞれ八つに分岐した大蛇、「巨蟒」あるいは「八岐大蛇」と混同、あるいはそのものと理解していたのではないだろうか。

いずれにおいても、親神の「十全の守護の理」は、10の神名を配して説き分けられるが、をもたりのみことはくにとこたちのみこととともに、親神の表象とされ、「人間身の内のぬくみ、世界では火の守護の理」を表している。たとえば、「守護の理」の具体的な説き分けの場面においては、人間の身体内における温み、世界における火については、をもたりのみことのご守護だと教えられている。それは、親神の「守護の理」を具体的に一つひとつ確認することができるよう、あるいは、確認しやすいようにとの配慮からである。さらに、をもたりのみことは女性的根源神格であり、くにとこたちのみこととともに、親神の根源神格をなしている。

ちなみに、諸井政一著『正文遣韻』には「日様の御姿を大蛇といふは、だいである、此よ（世）のだいじやでといふ事をあらはしてあると聞せられます」とある。これは、をもたりのみことのお姿は大蛇であり、お天道様である。それゆえ「太陽が当たると心も身体も温くなるこの世の中は、大事や（大蛇）で」と解釈することもできるのである。

どんなときでも、どんなことでも、親神は、心身を温かくしてポジティブに考えるよう、私たちに促されているように思う。